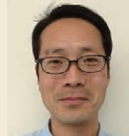




う え だ せい たい
上田製袋 株式会社

- 短納期
- 小ロットOK
- 量産OK
- 試作OK
- オカシ技術

代表取締役
う え だ かつ ひ こ
上田 克彦 さん



製袋加工でより良いものを追求し、常に進歩し続けます

昭和42年に父の上田三郎が創業して以来、食品包装用の袋や医療現場で使う滅菌バッグなどを加工しています。滅菌バッグは袋の頑丈さや剥がしやすさを兼ね備えなければなりません。熟練工のノウハウやデータの蓄積により、顧客の要望を満たす袋を納品しています。平成27年には大学などと連携してマイナス196℃でも生体保存できるフッ素樹脂バッグを開発し、現在は大学病院と実証試験を続けています。小さな会社でも新事業に携われることを社員に示しながら、これからも社員が希望を持って働ける会社を目指します。

■主な事業内容

滅菌バッグをはじめとするメディカル向けパッケージの製造、その他、食品・一般雑貨向け袋の製造

■主な取引先(納入先)

岡田紙業(株)

住 所 / 〒570-0002
大阪府守口市佐太中町2-13-22
TEL / 06-6916-5005
FAX / 06-6916-5006
創 業 / 昭和42年10月
設 立 / 平成元年10月
資本金 / 1,000万円
従業員 / 23名

<http://www.uedaseitai.com/>

フッ素樹脂バッグの実用化で、医療分野をさらなる開拓

事業内容と沿革

医療向け滅菌バッグなどを月に450万袋加工

「上田製袋」は昭和42年に「上田製袋工業所(平成元年に今の社名に変更)」として創業した製袋加工会社。「笑顔と活気にあふれたチームとして、ものづくりをする『安心の笑顔の起源』となる企業」を目指し、注射器やメスなど手術具を入れる滅菌バッグを手がけている。創業当時は菓子など食品用の包装袋を作っていたが、昭和59年に滅菌バッグの加工を始め、現在では医療分野が売上高の70%を占める。

社内には材料のポリエチレンやポリプロピレンを貼り合わせる製袋機を12台備え、手術着が入る60cm×1mの大型袋から手術針を入れる3cm×5cmの袋まで月に約400種類を加工し、月間の加工枚数は最大450万枚を誇る。

平成27年には自社の溶着技術と大学のレーザー溶接技術を融合して、マイナス196℃で生体組織を保存できるフッ素樹脂バッグを開発した。現在は実用化に向けて大学病院と実証実験に取り組んでいる。



①手がけている滅菌バッグ
②整理された道具類
③3S活動の様子
④検品作業
⑤従業員の集合写真
⑥本社社屋外観

強み

絶妙な力加減でシート同士を貼り付ける技術

滅菌バッグの材料になるフィルム同士の圧着技術でノウハウを蓄積しており、高品質のバッグを提供できるのが強み。フィルムの素材ごとの厚みや水分量、熱圧着する際の温度で、フィルムの剥がれやすさや袋の開けやすさが変わる。そこで熟練したスタッフが、素材に熱を加える時間や力加減を微調整して、軽い力で引くと簡単に開く袋や頑丈な袋、不織布とフィルムを合わせた特殊な袋などを作ることができる。

また、フィルム加工時のデータを長年蓄積しており、過去のデータを参考に若手社員でも熟練工並みに取引先の求める製品に対応できるようになったほか、品質の面ではフィルムの引っ張り強度を計測できる機器を3台導入したことにより、指示書どおりの強度を保ちつつ開けやすい袋を納品している。さらに工場内のカメラをインターネットにつなぎ、取引先がいつでも映像を確認できる環境も整えた。これらの取り組みが取引先からの高評価につながっている。

取り組み

異業種と連携して3S活動

加工品の70%が使われる医療業界において、不良品の混入は他の業界以上に許されない。そこで同社ではこれまで3S(整理・整頓・清掃)活動に力を入れてきたが、「大企業と違い中小企業単体で取り組むには限界があった」と上田克彦社長は振り返る。

そこで、平成27年にコンサルタント会社から紹介された大阪府内の2社(段ボール製造会社と和菓子製造会社)と協力して、3S活動により不良品ゼロを目指す「生産革新研究会」を立ち上げた。月1回の会合に同社から4名程度を参加させ、各社の課題解決に向けて意見を交換し、その中でできそうなことを社内で実践している。

例えば、工場の床にテープを貼り、歩行スペースと作業スペースを区別した結果、人と機械の接触を減らし、異物がラインに入るリスクを抑えた。また、はさみやテープなど道具の保管場所を明確にして道具の紛失も減らせた。「研究会に参加し取り組んだことで、自社の作業効率がアップした」と上田社長は喜ぶ。

今後の展開

フッ素樹脂バッグの拡販へ

今後力を入れていくのは平成27年に開発したフッ素樹脂バッグの実用化だ。現在は大学病院と協力して、3年かけて安全性などを確かめている。これまで移植用生体組織や細胞を凍結保存するためのポリエチレン製バッグは、国産品もあるが低温の環境下で劣化しやすく、現状では1袋5,000円程度(心臓弁の凍結保存に使う袋の場合)の丈夫な米国製バッグを使わざるを得なかった。今回の取り組みが成功すれば、「従来品よりバッグの価格を約40%は抑えられる」と上田社長は話す。現在も製造に必要なレーザー設備を改良し、より作りやすいバッグの開発を続ける。

将来的には滅菌バッグ、食品用包装袋に続く同社の「第3の事業に」と期待する。さらに、製袋機導入による生産能力向上や、年に1名から2名程度の採用にも前向きに取り組みながら「平成34年度には全体の売上高を平成28年度比1.5倍の約2.5億円にしたい」と上田社長は意気込む。